

はじめに——空間イメージとその変容

空間は、私たちの経験とともにある。だが、それは、目の前の花や遠方の山々と同じ仕方对于我们に対して姿を現わすわけではない。空間は、そこにおいて花や山、一般的にいえば「対象」が現われる場として背景に留まる。近代的空間論の金字塔、『純粹理性批判』『超越論的感性論』で、イマヌエル・カントが空間を「あらゆる外感の現象の形式」と規定したのも、同じことを語っている。視覚を始めとする「外的感覺」に現われるものは、かならず空間という形式において現われるのであり、一方形式自身は、いわばこの現出の素地として、背後に退いて対象化されない。

もっとも私たちの生は、基本的に対象との関わりの中かで遂行されるわけだから、空間というこの背景とともにあり、そうである限りこの素地も私たちにとって、なんらかの仕方と与えられている。ただし私たちは、さしあたりいたいこの所与の特異性を忘却し、空間をあたかも一つの対象であるかのようにイメージする。それはおそらくイメージを介さず、「なま」の空間をそれ自体において取り出すことが不可能だからであろう。そういう意味では、「空間そのもの」など、ありはしない。カントが空間とともに感性の形式と規定した時間について語った言葉を転用すれば、空間もまた「それ自体独立しては存立しないもの」(was für sich selbst nicht bestünde)なのだ。近代西洋に生まれた三次元空間とて、ただのイメージにほかならず、原本的に与えられている空間とは本質的に別なものといわねばならない。その証拠に、後者が私たち自身そのなかに生きている場であるのに対して、均質で無限に広がる前者は、それを眺め測定する視座を己れの外部に想定している。

場としての空間とそのイメージとの差異に顧慮することは、近代的な「純粹空間」の支配がいかにか強力であっても、別なイメージがありうること、さらにイメージが絶えず変化しうることに、私たちの目を開かせてくれる。なるほど私たちは、自らの生の方位を定めるとき、均質な空間のイメージを一応は想定しているが、同時にもっと微細な、あるいは奇怪なイメージに身を委ねることがあるし、芸術や文学を通して他人が自分とちがう空間イメージ

を生きていることに気づかされ、驚きを覚えたりもするのだ。

のみならず近年の空間イメージの変化と多様性は、単に個別的な経験のレベルに留まらず、むしろ普遍的に考究すべき事柄となっているように思われる。それは高度に発展した現在の科学技術に関わることであり、たとえそれが近代の物理学的空間イメージをその生い立ちの原点にもっていたとしても、その驚異的な展開がもたらした今日的状況において、この原点がそのまま無傷に保全されているとは、到底思えない。いうまでもなく航空機の発達は、20世紀初頭1月半かかった日本とヨーロッパの間をわずか10時間あまりに縮めたし、前世紀末から急速に普及したインターネットは、音声と視覚の世界で、この距離をほとんど零に近づけた。こうした短縮は、世界の均質化を生み出す一方、それに対する反作用でもあるかのようにロカリゼーションを促している。「グローカル」という奇妙な言葉は、そうした変化の一つの帰結であろう。

おそらく空間のイメージは、今後も変容し続けていくにちがいない。空間が、上で述べた通り経験の下図だとすれば、そのイメージの変容は、経験の主体としての人間の生のあり方の変化ともつながるはずである。いいかえれば、空間イメージは、人間の自己理解の、少なくとも一つの基本要素であり、その変化は人間の世界のなかでの生きざまの変化でもあろう。近代国家がもつ「国境」という、一つの空間イメージは、ネットを通じて拡散するISのたちを、もはや捉えることができない。後者を「国家」という人間的生の形体から排除することはたやすいが、それは知が固定化し枯渇していくことのしるしではあるまいか。少なくとも私は、空間イメージの変容に対して、知性の柔らかさを保持したいと思う。そうした考えに立ち、本冊子の基になったシンポジウムは、科学技術時代における空間イメージの変容のさまを、歴史的に、あるいはジャンル横断的に見てみようという方向で、企画されたのである。

この機会に一ついい加えておきたいことがある。それは空間とともに、人間の理解と経験との基本的下図である「時間」のことだ。時間もまた、空間と同様、それ自体姿を現わすことなく、背後に退き、その退去において経験

の遂行を可能にしている。考えるべきは、両者の関係である。

カントは上記感性論で、「外感」の形式である空間から時間を「内感」のそれとして区別し、後者をより根源的なものと考えた。マルティン・ハイデガーが時間を存在理解の原初的な地平として考えようとしたのも、カントにおける両者の関係性を受け継ぎ、それをよりラディカルに表現したとも見なしうる。ちなみに『存在と時間』の空間論は、どうみても深い議論を展開しているとはいえないのだが、その彼が晩年、時間がそれだとされた存在の意味を、森のなかの開かれた場所を指す **Lichtung** という言葉で指すようになる。あるいは **Zeit-Raum** もしくは **Zeit-Spiel-Raum** という言葉も使うようになる。つまり空間的なニュアンスが存在の意味としての時間に加味されるのである。

そうしたこともあって、或るときから私は、空間と時間とが、いうほど厳密に分けられるのだろうか、両者の区別や純化が、かなり人工的な所作ではなかったのか、と思い始めた。「時間なき空間」というのがあり得ないように、「空間なき時間」もまた観念的に作られたものではないのか。カントによる両者の区別を見ると、議論のベースにあるのは、外感と内感の区別なのだが、「人間の身体が心性によって触発される」とカント自身定義した内感とは、空間性をまったく欠いているものなのだろうか。思考のプロセスは、たしかに時間の内部で進行するけれど、これもまた空間と無縁なものなのか。たとえば文学における言語的思考が、もしも空間性をもたないならば、それは無味乾燥なものに委縮していくほかあるまい。夏目漱石が《倫敦塔》あるいは《道草》で、また寺山修司が《田園に死す》で描き出した現在から滑り落ちていくような過去世界の空間的描写には、おそらく空間と時間の経験に関わる原初的なものか映っている——私の場合こうした考えが、空間を考えてみようとする試みの背後に動いている。要するに時間のことも頭の片隅に置いたかたちで、空間への考察を深めるといなのが、編者としての私の狙いだったわけである。時間イメージに関しては、改めて別な企画を立てたいと思っているが、以下の諸論稿は、それに向かう一歩となるはずである。

京都工芸繊維大学・伊藤 徹